岡山大学経済学会雑誌31(3),1999, 265～280

《書　評》

大学でどのように学ぶか

――神立春樹著『大学の授業―岡山大学における実践の記録―』を読んで――

相　原　克　磨

1　はじめに

著者，神立春樹氏は岡山大学の教官である。1970年に着任されてから現在までの約30年にわたり，経済学部における日本経済史を主に担当されてきた。またこのほかにも，他学部や全学共通の授業などを担当されている。それら「授業の回顧と反省を書き記してきた」集大成が本書『大学の授業―岡山大学における実践の記録―』である。

大学の大衆化が言われて久しく，折に触れて学生の質の低下が問題とされる。しかし一方で，多様な学生を受け入れてきた大学側も，その対応を変化させることが求められるだろう。著者は早い時期からこれらの点に留意して，自らの授業において解決の方向を模索し，それを記録してきた。著者の先進的で積極的な実践は高く評価される。

私は同大学で学部・修士課程と著者に指導を受け，現在は農水省の試験研究機関に勤務している。本稿では，本書を紹介するとともに，自らが研究職に就くまでの歩みを振り返りながら，著者から学んだことを記している。なお，本稿の特徴として，実際に授業を受けた者が，大学から離れてフリーに論じている点を挙げておきたい。

2　本書の概要

タイトルに示されるように，本書は実践記録である。各章には，学生便覧に記載されたシラバス，実際の授業の内容，授業に対する学生の評価（アンケートや感想），成績とその分布などが収録されており，これらから授業を振り返っている。

本書の章別内容構成は次の通りである。

序にかえて

第１章　一般教育科目の授業の反省

第２章　岡山大学における日本経済史の講義

第３章　1996年度日本経済史の講義―大人数授業での取り組み―

第４章　経済学部における演習の回顧―ゼミナール共同論文の試み―

第５章　第二部夜間課程の授業と成果

１）「第１章　一般教育科目の授業の反省」について

第１章では，著者が1980年代前半に担当した一般教育科目の授業（教育学部および工学部の１・２年生に向けた経済学の講義）に関して記されている。ここではとくに，教育学部生を対象とした1985年度の授業について，期末アンケートの回答からその特徴をみている。本稿では次の２点を紹介しておきたい。

一つは，授業の意義である。経済学に対する学生のイメージは，当初，「数字計算を用いた難しいもの」であったが，実際の講義は「日本の経済成長と教育制度の変革が深く結びついていること」を考えさせる内容であった。「あるべき経済学の授業」という点で，その内容が適切か否か著者も迷っている側面がある。しかし，経済学に興味を持たせるとともに，「教育が経済に影響を及ぼす」ことを悟らせ，教育学部生としての責任を強く意識させるに至った成果は大きい。

二つ目に，図書館の活用[1]である。『帝国統計年鑑』と『岡山県統計書』を用いて，学生に「事実を自分の目でくみとる作業」を行なわせたその効果である。これは，高校までの社会科教育の特徴である記憶型学習から脱却させるための試み，あるいは実証研究を体験させる試みと捉えることができる。

授業を通して著者が得た学生像は，「学ぶことに対して強烈な欲求をもっている」というものであった。一般に，「学問に対しては無気力で，モラトリアム」と評される学生であるが，著者の経験からはそれとは異なる学生像が描き出されている。

2）「第2章　岡山大学における日本経済史の講義」について

第2章は，著者の主担当科目である日本経済史の講義に関する，1971年度から1994年度までの記録である。著者は講義内容を振り返り，「当初の約10年間の通史的なものから，数年にわたる特定のテーマでの試みの後，日本産業革命論というものに収斂した」と総括している。[2]

特定テーマで開講された1982年度については，授業の経過や学生の評価が具体的に綴られている。これは，暉峻衆三氏の提言[3]を受けて，著者が雑誌『経済』に投稿し掲載された全文[4]の再収録でもある。

暉峻氏は，大学の荒廃と危機の悪循環を，「大学の大衆化とも関連して，大学教員が学生の質が低下したという認識に徹する→講義やゼミを手抜きする→つまらない授業となって学生も消極的な対応をする→教員はいっそう不信感を持ち手抜きを強める」と指摘し，教員・学生ともに危機打開の努力が必要なことを訴えている。これに対して，著者は「授業が大きな負担ということだけになってしまうことのないように心がけている」自らの取り組みを披瀝している。

1982年度は「日本資本主義における地主制」というテーマを設定し，具体的には岡山県の地主制に素材を求めた。これは，著者が地主制研究の取りまとめに入ったことのほかに，地元の岡山県を取り上げることで学生の関心を

ひき，かつ理解が深まることを期待してのことである。著者のねらい通り，学生からは「実感を持って授業を受けることができた」，「三家系[5]の資本主義成立期における生き様にふれた」，「身近な家の土地制度，経営形態をみた点（中略）がおもしろかった」などの評価が返ってきている。このように，地域に根ざした特定テーマの講義は功を奏し，魅力ある授業になったと考えられる。

一方，講義ではテキストを用いず，著者自ら作成したプリントと板書によっている。多くの学生は「緊張して聞ける」，「出席するようになる」と肯定的である。中には「テキスト，あるいは過去の研究を整理しての講義は（中略）退屈である。それよりも，いままさに手がけられている研究を発表する方が聞いていてわくわくする」という意見もあった。

当該講義について，著者は出席率と試験成績との相関を捉えている。そして，出席率が高い者は理解度も高いという結果が導かれている。このように，教える側の積極的な働きかけには学生も鋭く反応し，善循環が形成されていくことを著者は実証している。

第2章第6節では，1971年度から1994年度までの日本経済史における，学生の履修状況と成績が一覧表となって収録されている。そして著者は，定員数・配当年次・履修率等と，期末試験合格率との関係をみている。そこから，著者の授業への臨み方によって，つまり「学生たちを授業に出席するように仕向けるという姿勢で臨むか否か，それを貫くか否か」によって，合格率の年次間差異が生じたのではないかと分析している。学生を出席させるためには，授業時間中に小ペーパー（レポート）記入を課すといった技術的工夫も必要であるが，本質的には授業内容と教授法が重要なことを著者は記している。

それにしても，このような長期に渡って学生の履修状況や成績を保存・記録したものは希有であり，貴重である。こうした作業は上述の日本経済史以外でも行なわれており，本書中では，昼間課程の演習（第4章），および第二

部夜間課程の日本経済史（第５章）において掲載がある。

３）「第３章　1996年度日本経済史の講義―大人数授業での取り組み―」について

第３章の前半では，大人数授業における教官と学生たちとの攻防が，ドキュメンタルに書き記されている。また後半では，この授業に対する学生の評価をふまえた著者の反省と教訓が述べられている。

1996年の日本経済史には常時約400名の学生が出席していた（履修登録は562名）。その背景には，前年度に当該授業が開講されなかったこと，受講の対象が３年次以上から２年次以上に広げられたこと，この時間帯に他の授業が無かったこと，という特殊な事情の重なりがあった。

第１時限目（８時40分開始）という悪条件も加わったなか，如何にして遅刻と私語を無くし授業を成立させるか。第３章では，著者の苦悶と工夫が紹介されている。

授業の第１回目も第２回目も遅刻者が多く，その対策として，第３回目では授業開始直後から小ペーパーを記入させている。そして９時になったところで「以降の入室を認めない」との張り紙を教室入口に掲示する。ところが学生たちは許容範囲を９時までと曲解し，第４回目は遅刻者がいっそう増加してしまう。そこで，第５回目以降は完全に遅刻を認めないことにし，「本日の日本経済史の講義は開始しました。遅刻者の入室を禁じます。理由は講義の妨害となるからです。なお第２部の日本経済史の講義を（中略）行なっているので，それを聴くことを許します」という文書を教室の扉に掲示している。さて，第６回目以降は遅刻に関する記述がみられず，先の対策を講じた結果，遅刻が大幅に改善されたと考えられる。

一方，授業中の私語に関しても，授業回数を経るごとに落ち着いてきた様子が窺える。教室内への入退出を厳しく制限したこと，授業時間のなかばに休憩を入れるようにしたこと，プリントの配布や回収中に雑談を認めたこ

と，が技術的工夫として挙げられる。もちろん，授業が進むにつれて，学生の関心が高まったこともあるだろう。

著者はなぜ遅刻と私語に厳しい態度を取ったのであろうか。言うまでもなく，講義する側にとって邪魔なうえ，講義を受ける学生にとっても迷惑だからである。期末に実施したアンケート結果にもそれは現れており，遅刻を認めなかったことには6割の学生が賛成し，私語を禁じたことには8割の学生が賛成している。他方，遅刻を厳しく制限したことには反対意見が約3割を占めている。著者も，理由の如何に関わらず入室させなかったことには問題があるとしながら，他に方法がないと述べている。もっとも著者は，第二部（夜間課程）の聴講やオフィス・アワーでの質問を許可して，その授業を受けられなかったことに対するフォロー体制を調えていた。

著者は毎回の講義で小ペーパーの記入を課している。これについても学生の8割が賛同している。学生にとって平常点が勘案されることは重要である。そして著者にとって，小ペーパーは学生の理解度を確認することのほかに，出席を促すことにもねらいがあった。

その小ペーパーの課題は特徴的である。例えば「幕藩領主制経済の基本構造」をイラストで描かせたり，「三重紡績所を訪ねて」というテーマでルポルタージュ風に書かせたりしている。こうした課題にはノートの丸写しでは対応できないため，学生の理解度が如実に示されたであろう。そしてまた学生の表現も多様であっただろう。多くの回答に目を通す作業は大変であるが，様々な個性に触れることは，著者も楽しみではなかったろうか。

それにしても，授業の準備と事後の整理には多大な時間と労力が費やされている。講義プリントや小ペーパーは，印刷から採点後の記帳まで全て著者一人で行なわねばならない。しかも講義は一科目に留まらない。著者は，他大学の非常勤講師や行政機関の委員などに関わることなく本務校での研究・教育等に専念しているが，それでも時間に追われている。充実した教育を実施していくには，これら教育面における支援体制の整備が必要であり，その

拡充が望まれる。

以上みてきたように，著者は大人数の授業についても毅然とした態度で取り組んできた。学生の方も，それを授業に対する著者の意気込みとして感じ取っており，アンケート項目の「担当者の教える熱意」では9割の学生が高く評価している。後期セメスターでは日本経済社会史論が開講され，前期セメスターの日本経済史以上に履修者が増えている。しかし，この講義についても，著者は前期の実践を踏まえたやり方で授業することを決意している。それは，「学生たちに支持されたことに励まされて，（中略）授業とは，まことに教員が学生とともに創りあげていくもの」と感得したからである。

4）「第4章　経済学部における演習の回顧―ゼミナール共同論文の試み―」について

第4章は，経済学部において著者が実施した演習に関する実践の記録である。経年の演習内容をみると，「戦前期日本資本主義史における諸問題の検討」といったテーマが多く，その中でさらに農業問題や地主制問題に焦点を絞ったものをみることができる。ゼミナールの基本的な目標は共同研究と共同論文の作成であり，さらには法学部・経済学部学生論文誌『SPIRAL』に投稿することが求められる。

とりわけ注目すべき演習は1990～91年度であり，1991年には農家悉皆調査が行なわれている。この調査は，著者の携わっていた町史編纂事業の一環として，岡山県川上郡川上町において実施されたものである。演習生，院生，そして他大学の学生も参加し，集落の全居住世帯を訪問して面接調査する大規模なものであった。

農家の位置付けや集落の階層性を明らかにするためには，悉皆調査を行なうことが理想的である。しかし現実に悉皆調査は難しく，役場や農協，および数戸のサンプル農家からの聞き取りに限られる場合が一般的である。こうしたなか，川上町の3集落で悉皆調査が実施できたことは大変な幸運であっ

た。そして，学部レベルの演習でこのような調査を実施できたことは，学生にとって得難い経験であった。

結果の取りまとめに際しては，ゼミ生15名が各集落ごとに3つのグループに分かれて共同研究を行なっている。学部学生の居室が与えられていない岡山大学経済学部にあって，演習時間以外にも自らで談話室を確保し，あるいは下宿に集まって共同論文の作成が進められた。そしてそれは調査報告書，および学生論文誌『SPIRAL』として実を結んだ。著者も，「後年になるほどに20世紀末の日本の農村の実態を示すものの一つとして，その資料的価値はいっそう高まる」と記している。

著者はこれまでのゼミナールを振り返って，共同論文や共同研究の実現には，多くの場合「リーダーとなる者のいるゼミクラス」という条件があったことを指摘している。具体的には，学生会・大学祭・大学生協設立準備会[(6)]などに関わるような学生がいると，「彼らを中心としてまとまりがよかった」と回想している。前掲のような自治的組織に参加する学生は，そもそも何らかの問題意識や探求心を持っているであろうし，何かを生み出そうとするエネルギーも豊富であろう。また，そうした学生が著者のもとに集まったということは，講義や普段の会話において，著者から湧き出る鋭気を感じ取っていたからと思われる。

5）「第5章　第二部夜間課程の授業と成果」について

岡山大学経済学部には第二部夜間課程がある。著者はその第二部においても，日本経済史をはじめ，その他の講義・演習・外国書購読を担当されてきた。

第二部でも図書館を利用した授業が行なわれている。例えば1992年度の経済地理学（教職科目）では，『農業センサス』を用いて戦後農業の変化を検討させている。それは，地理歴史教員に必要な調査分析能力を育成するためである。さらに，教員になったつもりで，子供でも理解できるようなレポート

の作成を求めている。

第二部学生の学期末における感想に，「図書館を通じて，勉強の仕方を勉強することが始まった」というものがあった。一般に，レポートが課されたり試験が近付くまで，図書館に足を運ぶことは少ないであろう。しかし，通い慣れるほどに，図書館は自ら真理を探究するための絶好の場所であると認識される。その好機を著者は提供している。

第二部夜間課程は，限られた時間枠のため相対的に授業への出席率が高くなる。また，入学定員が小さいこともあって，一般的には少人数の授業となる。これらの点で，第二部は実習的授業を行うのに条件が良く，大学教育の大きな可能性があると著者は述べている。ただ，教育改革・大学制度改革にあって，夜間課程を持つ大学・学部が減少してきている。著者は，継続ゼミナールの開設や教員の第二部担任制など，諸種の課題を提起している。

3　著者の授業の特徴と教育哲学

本書に記された内容から著者の授業スタイルの特徴をまとめ，その奥に内在する著者の考えに接近してみたい。

特徴として次の5点が挙げられよう。①授業を静かに受けさせるため，遅刻や私語を厳しく禁じている。②授業中に小レポートを課し，平常点としてカウントしている。③図書館での実習を含めた授業を行なっている。④題材は地域に根ざしており，手作りのプリントを用いる。⑤学生に授業を評価させ，次回に反映している。

これらの特徴すべてに共通すること，つまり根底に流れるものは，学生を授業に出席させるという決意である。授業に出させることは，大学が荒廃していく悪循環を断つための基本条件なのである。

私の学生時代を顧みたとき，級友の中には大学生活をモラトリアム期間と解釈し，漫然と過ごす者も存在していた。しかしここで学生側の怠惰・怠慢

を差し置いて，授業に出席しない原因を教官側の責任に帰すれば，授業が面白くないことや，成績の評価方法に疑問を感じていること等があると考える。

授業が面白くない理由には，内容的なものと技術的なものがある。前者は，テキストの朗読や重箱の隅をつついたような研究紹介といったものが該当し，後者は，声が聞こえない，板書が読めない，あるいは学生の私語や入退室による喧噪といったものが該当するだろう。

一方，成績評価については，とりわけ試験が学期末の一発勝負となる点を指摘できよう。本書の中でも，大人数授業を乗り切る策として，「学生を出席させず試験の時だけ多数の答案を読めばよい」との助言を受けたというくだりがある。学生の間で，さる教官は試験回答を扇風機の前に置き遠くへ飛んだ物から高得点を与えている，などと噂されることがある。教官も，何百もの答案を見ていたのでは疲れるし，手を抜きたくなるだろうし，ミスの可能性もある。実のところ学生は，これらのことを直感するのである。

著者の実施した，遅刻・私語の禁止（①）は授業環境を整え，学生へのアンケート（⑤）は授業内容を充実させ，魅力ある講義（③・④）を行なうために有効に機能している。また，小ペーパーの実施（②）は，成績評価の振れや採点ミスを最小限に抑えることにつながっている。これらの相乗効果によって，学生の出席が促されていると考えられる。

ここで別な教官の事例を紹介しておこう。ある授業（経済学部ではない）には，毎年多くの履修届が出されると聞いていた。私は登録していなかったが，何度か授業に出てみたことがある。それが毎回，講義時間の大半を費やして，学生一人一人の出席を取っているのである。その間は学生にとって雑談時間であり，そして返事が済めば，あるいは友人の分も返事して，そそくさと退室しているのであった。教官のひどい怠慢である。もちろん，このような講義を履修して単位を狙う学生も堕落している。悪循環が起きていた極端な例といえる。

すべての教官が著者ほどのバイタリティーで学生に臨むことは難しいかもしれない。しかし，教官と言うからには大学での教育という側面を強く意識して欲しいのである。著者は本書において，学生の質が落ちたと決めつけることの誤りと，教育を投げ出すことの危険性を訴えている。

4　大学で習得した研究スタイルと現在の仕事への継承

1）学部・修士課程における研究スタイル

私は比較的早い時期から進学を考えていた。そのため，講義や単位の取得に関して，一般的な学生とは異なる姿勢で臨んでいたかもしれない。それを考慮して，以下では演習を中心に据え，著者から学んだ研究スタイルとして紹介したい。

著者と私との出会いは，学部1年配当の外書購読の授業であった（1987年)。これは学籍番号で単純にクラス分けされたものだったが，振り返ってみれば運命的であったようにも思われる。3年次における演習では日本経済史を選択した。その理由には，そもそもの日本経済史に対する興味・関心に加え，既に著者の授業を受けていた経験が更に学びたいという気持ちを呼び起こした事もあった。

3年次の演習（1989年）では，当初，文献の輪読が行なわれた。具体的には，長岡新吉編著『近代日本の経済―統計と概説―』がテキストとされ，この論文の理解を深める一方で，図書館における統計資料の利用についても学んだ。これらを踏まえ，演習後半ではゼミ生みずからの出身地について，農林業センサスを使って統計的概観を行なうこととなった。私はその手がかりとして，著者が岡山大学経済学会雑誌に書かれていた2本の論文[(7)]を参照することにした。著者から「大学紀要に自分の書いた論文があるので参考にしなさい」，あるいは「その論文を真似するつもりで取り組みなさい」というように言われたことを記憶している。

まず，論文に掲載されている図表を作るべく，自分のデータと入れ替える作業を始めた。図書館に行き，センサスから必要な数値を拾い上げてノートに書き写し，さらに自宅でワープロに入力していった。それから，図表の読み方から文章構成，その表現方法までも著者の論文に倣って仕上げていった。模倣とは言っても，こうした作業は，勉強から研究へ踏み出せた気がして充実感を覚えた。そしてそのレポートは，学生論文誌に掲載されたこともあって，さらに大きな達成感となった。

4年次（1990年）は，ゼミナール修了論文を書き上げる必要があった。したがって演習の時間は，比較的早い時期から各人の論文の構想について意見を出し合い，進行具合を確認することとなった。

私は，3年次における農業センサスを用いた統計的概観から，農業問題への関心が高まっていた。このとき著者は農水省の構造改善基礎調査に関わっておられ，1990年の夏に鳥取県名和町の農家調査を実施される予定であった。そのため私にも声を掛けて下さり，私はそれをゼミ論文の材料にできないかと考え，参加することにした。

実際に農家調査を行なうのはこれが初めてだった。この時は，農家の方々に公民館に集まってもらう形が採られ，私は著者や農政局の調査担当者の脇に座って，どのように聞き取りを進めていくのか観察し，調査のテクニックや用語を学んだ。

結果の取りまとめに関して，著者から「いっそのことゼミ論文を構造改善基礎調査報告書として作成しないか」と提案された。私の業績として公に（印刷物に）しようという著者の心遣いである。責任の重さに戸惑ったが，チャンスを活かすべく執筆することを決めた。前年に著者が書かれた報告書[8]があり，それを目標とした。一方で，その中に何か少しでも自分の独自性が出せないかとアレンジを模索した。これは無事に報告書[9]として刊行されるとともに，ゼミナール修了論文としても認めていただいた。

1991年の春，修士課程への進学が決まり，岡山県川上町における農家悉皆

調査にも参加した。既述のとおり，この調査は個々の農家を訪問するスタイルであった。自宅のため調査員以外に人が居ないこと，しかも相手が学生ということで，対象者も本音を語ってくれたのではないかと思われる。またお宅に上がり込むことで内実にも触れることができ，聞き取り項目以外の収穫も多かった。

対象の川上町は中国地方の中山間地域に類型され，高齢化・過疎化・耕作放棄がひどく進行していた。それは，農家・農村が崩壊する寸前の危機的状況であった。センサスなどの統計数値には表れない，まさに現実を実感する絶好の機会となった。そしてこのことは，さらに農業問題へ傾倒する誘因となった。

先に述べたように，川上町での調査は演習生の共同研究の題材となっている。その報告書[10]の作成に際して，光栄にも私はその編集を任された。他方，私自身もこの調査データを用いて修士論文を作成することになるのだが，完成までには曲折をたどった。

2）指導学生に対する著者の教え

これまでにみてきたように，一般学生に対して，著者は学生が興味を持つような授業を行なわれていた。そこでは，大学において，どのような手段・方法でどんな勉強をしていけばよいか，具体的な指示を出されている。しかし，学生の問題意識が鮮明となり，課題の設定やその解明といった作業に移ってくると，ただ見守る人に変身するのであった。

著者は，受け持った指導学生に対して，通常イメージされるところの指導を行なうことはなかった。例えば文章の査読などをお願いしても，字句の誤りを正す程度に留められていた。「研究とはオリジナル性が求められるのであり，私が朱を入れればそれは君の物ではなくなってしまう」というように言われたことを記憶している。

数年を経た現在，まだ著者の教えを十分に消化できたとは言えないが，現

在の仕事に活かすべく努めている。その一つは，事実・実態を捉えることである。統計データの分析が必要なことは勿論であるが，問題の核心に迫るためには現場に行くことが不可欠である。二つ目に，オリジナリティである。これは大発見を求める訳ではない。先人の研究を引き継ぐ中にも，何らかの別な視点や別な発見をつけ加えるということである。三つ目に，成果を惜しまず公表することである。例えば著者は，季刊である岡山大学経済学会雑誌に欠かさず投稿するなど，精力的に執筆されている。

3）現在における自らの研究

現在，私は農林水産省北海道農業試験場に勤務している。自然科学が中心の研究機関にあって，社会科学系の研究者に与えられている一つの使命は，新しい技術の経営的評価である。試験場が普及・推進していこうとする技術，例えば省力・効率・低コスト等を実現する新技術について，あらかじめ評価を行ない実際の普及に必要な条件や可能性を示すことである。

農家を訪問する機会は多く，大規模に経営を展開している北海道農業をつぶさに捉えることができる。そして，中国中山間とは違った状況に置かれた農家の危機感も強烈に伝わってくる。

現場に近いこともあって，早急な研究成果の公表が常に要求されている。しかも今後は，いっそう短期間で形となるような，そして事業として成立するような研究が求められると予想される。それは試験研究機関の独立行政法人化（エージェンシー化）であり，ここ数年のうちに研究環境は大きく変わろうとしている。

5　今後の研究・教育環境に対する憂い

2001年4月から，我々を含む複数の研究機関が独立行政法人に移行することが決まっている。独立行政法人化することによって，「国から運営を切り

離して予算の自由裁量を広げる代わりに，外部から業績評価をすることで業務の効率化を図る（朝日新聞朝刊，1999．4．28)」等の理由付けがなされている。具体的には，外部評価委員会が3～5年ごとに各法人の業務を審査する，つまり，この間の研究成果により，法人の継続や解散が判断されることになる。短期間では結実しない研究分野も存在するなか，果たして数年の成果から，無駄や非効率な研究を見分けられるのだろうか。そもそも研究に「業務の効率化」がなじむのだろうか。

国立大学においても，独立行政法人への移行が言われている。試験研究機関とは異なり，2003年までに結論を得るとの段取りであったが，繰り上げて議論される可能性も出てきている。大学教官も，今以上に短期間で数多くの研究成果・業績をあげなければならなくなる。研究面でそうした状況におかれたとき，教育をどのように行っていくのだろうか。

む す び

すでに知られていることであろうが，著者，神立春樹氏は古島敏雄氏の門下生である。著者の研究スタイル，そして教育スタイルは，古島氏のそれを大いに踏襲していると推測される。著者の，古島氏への追想では，「指導学生に対しては，それぞれの興味と関心から研究課題をみつけ，みずから育っていくのを見守るという姿勢でした」と記されている。

既にみたように，著者も，指導学生に何らかのきっかけを与えて以降は「見守る」姿勢で臨まれた。それは研究のオリジナル性という次元以上に，研究者として自立させようという信念があってのことである。この考えに基づく指導は院生に留まらず，演習生や通常の講義でも試みられてきた。

大学でどのように学び，何を得るのか。学生は新たな知見を蓄積するだけではなく，自ら問題を見つけそれを解決する力を身につけるために切磋琢磨することが求められよう。そして大学の教官には，「学生たちのもつ秘めた

る力は大きい。それを引き出すことを援助するのが教員の役割である」という著者の言葉に耳を傾けて欲しいものである。

注

（1）図書館に関する論考については，著者の『大学図書館図書資料論』（御茶の水書房，1996年）を参照されたい。

（2）岡山大学では，当初，法文学部のなかに経済学科が設置されており，そのカリキュラムにおいて日本経済史は選択必修科目となっていた。その後1981年に経済学部が設置され，日本経済史は経済史関係科目の一つとして位置付けられた。つまり1981年以降は，より基礎的な経済史および現代日本経済史が開講されたため，日本経済史の講義はそのテーマを限定することが可能になった。

（3）暉峻衆三「経済学教育と現代学生―私の経験から―」，『経済』193号，新日本出版社，1980年5月

（4）神立春樹「日本経済史講義の経験から」，『経済』229号，新日本出版社，1983年5月

（5）岡山県の大地主であった倉敷市の大原家，牛窓町の西服部家，および東服部家を指している。

（6）岡山大学生協は1994年12月に設立され，翌95年から営業を始めている。

（7）現在，『戦後村落景観の変貌』（御茶の水書房，1991年）にも収録されている。「戦後農業集落の変貌―村落景観論的考察の前提としての統計的素描―」および「岡山県にみる戦後農業集落の変貌―「農業集落調査」にもとづく統計的概観―」。

（8）『平成元年度　構造改善基礎調査報告書―岡山県上房郡賀陽町―』，中四国農政局，1990年3月

（9）『平成2年度　構造改善基礎調査報告書―鳥取県西伯郡名和町―』，中四国農政局，1991年3月

（10）岡山大学経済学部神立ゼミナール（相原克磨編）『川上町における農家の生産と生活―岡山県川上郡川上町農業集落農家調査報告書―〔川上町史編纂事業〕』，岡山県川上郡川上町教育委員会，1992年3月

（農林水産省　北海道農業試験場　総合研究部　経営管理研究室　研究員）

（『大学の授業―岡山大学における実践の記録―』大学教育出版　1998年4月
viii＋141ページ）